

## 錯綜する語りの中で 民俗芸能/文化財/観光資源としての「念仏踊」オーモンデー

Within Entangled Narratives: *Nenbutsu-odori (Omonde)* as Folk Performing Art, Cultural Property and Tourist Attraction

才津祐美子

はじめに

- ①オーモンデーはどう記述されてきたか
- ②西海国立公園促進運動と観光資源の開拓
- ③「南方」系という語りの行方

おわりに

### 【論文要旨】

本稿では、オーモンデーという民俗芸能（「念仏踊」といわれている）の起源の語りにも焦点を当てて議論を展開していく。なぜ衣装や芸態など他の構成要素ではなく、起源の語りにも問題にするのかといえば、起源の語りにはそれを語る人の「願望」のようなものが込められているからである。民俗芸能と呼ばれるものの多くは、その起源が明確ではない。いつ、誰が、どのようにして、何のためにはじめたのかは、今となっては誰にもわからないのである。それ故に、多様な語りを許してきた。しかし、起源の語りというのは、単なる自由気ままな想像からのみ生まれるわけではない。いつ、誰が、どういう目的でそのような起源を語るのかということは、語り手自身がその民俗芸能をどう見たいかということと密接な関係がある。オーモンデーの場合、「南方」系の踊という説と、この説を全否定か部分否定する、あるいは全く無視する「風流」系の踊という説があり、この二つが主たる起源の語りとしてあげられる。本稿では、流通量としては圧倒的に多い「南方」系という語りの創出過程を丹念に検討した上で、それがテキスト間で援用されていく様子を考察していく。その際、対抗言説としての「風流」系という語りについても合わせて考察し、両説と語り手の関係について明らかにする。

また、本稿はこうした起源の語りに関する考察をもとに、現在の聞き取り調査で得られる資料を取り扱う際には一定の留保が必要であることを示す。われわれが「インフォーマント」と呼ぶ人々は、単なる「前世代からの伝承の継承者」ではない。彼らはテキストや口承など複数の形で知り得た「いろんな人」の話を自らの語りとする。

このように、フィールドでの語りは錯綜している。こうした状況は今後ますます加速していくだろう。テキスト間で、テキストと口承の間で、あるいは口承間で行われる不断の交渉の中で、新たな語りも創出されていく。賢しげな理論を振り翳すより、さしあたり、目の前の語りとも正面から対峙することからはじめるしかない。

キーワード：「念仏踊」オーモンデー、起源の語り、「南方」系、観光資源、文化財